越谷市文化連盟
平成２０年度

『こしがや文化芸術祭』

平成２１年２月２２日（日）　１０：００～１７：００

ＮＰＯ法人・越谷市郷土研究会

展示部門出品紹介

於　越谷コミュニティセンター　ポルティコホール

テーマ　『橋』文化のかけはし

『葛西用水に架かる平和橋（旧称・瓦曽根橋）』　高崎　力
『江戸時代の増林村の千間堀に架かる橋』加藤　幸一
『絵図と地図と写真でたどる大沢橋』　原田　民自

葛西用水に架かる平和橋（旧称・瓦曽根橋）

高崎　力

現在、市役所そばに葛西用水に架かる平和橋がある。これよりも下流に架かっていたものをここに移したのである。もとあった平和橋の場所は、現在の藤田医院と吉田酒店の中間にある瓦曽根一丁目バス停のところである。本来は、江戸時代より瓦曽根橋と呼ばれていた土橋であったが、戦後、平和橋と名称を変更したのである。

《江戸時代の瓦曽根橋》

烏文斎細田栄之の『瓦曽根溜井図』に江戸時代当時の瓦曽根橋が出ている。当然土橋である。対岸は小林村の会田家（現在の東越谷二―二―三）につながる。

《戦前の瓦曽根橋》

江戸時代から藤田医院そばのこの地点に土橋が架かっていたが、戦前は木製の橋で、太平洋戦争が始まる二年前の昭和十五九月に橋の途中で橋げたが腐り、陥没してしまった。

昭和六十二年十二月一日発行の「広報こしがや」の中の『こしがやふるさと話・橋の巻・平和橋編』によると、次のとおりである。

（東越谷二丁目の会田礼子氏によると）「（戦後）旧・平和橋ができる前は、（戦前に）瓦曽根橋と呼ばれた木橋があったんです。古い橋で、私が子供の頃からありました。欄干がなくて幅の狭い橋でしたから、風の強い日なんかは真ん中を歩いたんです。越ケ谷町に市（いち）がたつときなんかは祖母に手を引かれて（対岸に）よく渡って行ったのを覚えています。昔は川の水がきれいだったので、よく泳ぎました。渡れると橋げたにつかまって休んだんです。お転婆だったんですね。」

（東越谷一丁目の山口清氏によると）「戦争の前だったと思いますが、九月に行われる越ケ谷のお祭りに行ったんですが、次の朝、見てみると橋が落っこっちゃっているんです。渡っているとき落ちなくてよかったと、みんなで話したんですよ。」

《瓦曽根橋の修理》

山本泰秀氏の戦前の瓦曽根橋の修理についての調査結果を次に紹介する。

昭和十五年九月に落ちた橋を翌年の三月の終わり頃に修理が行われている。当時の増林村の村長は、山崎孫八であった。その指揮のもと、橋の修理が始まった。

建設業の元締めに大吉の田川郡二郎という人物がいた。彼は増林村に隣接した新方橋の扶で代々受け継がれてきた材木商を営み、一方で土木建設にも大いに携わっていた。橋の修理の現場作業員は増林村出身者で占められていたことから、この橋の修理を請け負った人物は、当然、田川郡二郎だと思われる。

現場作業員の大工は、大松屋（増林の前渡）の岡安常次郎とその弟子の中島三津蔵（増林の中組・大正十年十月二十七日生れ）で、窩には、栗原新蔵（増林の二子曽根）の他、四～五人があたっていた。

橋の修理には、まず丸太の取替えをおこなった。杉の丸太を並べ、その上に杉皮三枚程

江戸時代の瓦曽根橋（戦後は「平和橋」と改称）

《縮尺四分の一：複写加藤忠一》

鳥文斎栄之の『瓦曽根溜井図』

欄干がついた旧「平和橋」（小林側から瓦曽根方面を見る）

を載せて、押さえに竹を二つ割したのを使用した。さらに、その上に土を載せ、砂利を敷いたものであった。欄干は無く、橋の両端を丸太にしその丸太にドリルで穴をあけ、ボルトで締めた。いたって簡単な作りであった。橋職は、よいとまけでなく、橋げたの修理に発動機を使って、ウインチで地固めの作業をおこなった。こうして修理を終えたのである。

《戦後の名称変更後の平和橋》

昭和十六年三月に瓦曽根橋の修理がおこなわれたが、いつの頃からかまた朽ち落ちて、戦争中は何も架かっていなかった。『橋の巻・平和橋編』によると、次のとおりである。

（東越谷一丁目の鈴木知亥氏によると）「旧・平和橋は戦後にできたんです。戦前にも木橋が架かっていたんですが、老朽化して落ちてしまったんです。ですから、橋の全くない時代があったんですね。それは不便でした。」

昭和二十四年、戦後になってようやく欄干のない木製の橋、瓦曽根橋が再建される。その名称を「平和橋」と改称される。そのときのいきさつを次に紹介する。

（鈴木知亥氏によると）「（戦後の）平和な時代になり、新しく橋もできたので、みんな喜びました。そこで橋の名も『平和橋』としたんです。」そして、その当時の橋の様子は、

「（旧・平和橋は、）場所は今の橋（現在の市役所そば）よりちょっと下流です。瓦曽根の藤田医院の前に、その名残である出っ張り（今も、瓦曽根一丁目バス停の所に名残がある）と木が数本あります。対岸は東越谷二丁目の会田さんの辺りでした。地元では泥橋（どろばし）と呼ばれていましたが、木でできた橋でした。橋げたが丸太だったため、人やリヤカーが渡りやすいように土舗装がされていました。それで泥橋と呼ばれていたようです。長さは三十メートル。幅は二メートルぐらいでした。オート三輪車が通れたんです。それ以上の大きな車はだめでした。いまでいう重量制限は一トンぐらいだったでしょうか。

増林は四方を川に囲まれているので、橋は重要なんです。特に橋の少ない時代でしたので、この平和橋は農作物を越谷や東京方面の市場に運ぶ経済上の貴重な橋だったんです。」

元荒川と葛西用水が分離する前までに見られた木の橋である。江戸時代からこの地に橋が架けられ、対岸は東小林の会田家であることは変わらなかったのである。

この旧・平和橋は、昭和四十一年十一月二十三日に残念ながら崩落してしまう。

《現在地に移転してきた平和橋》

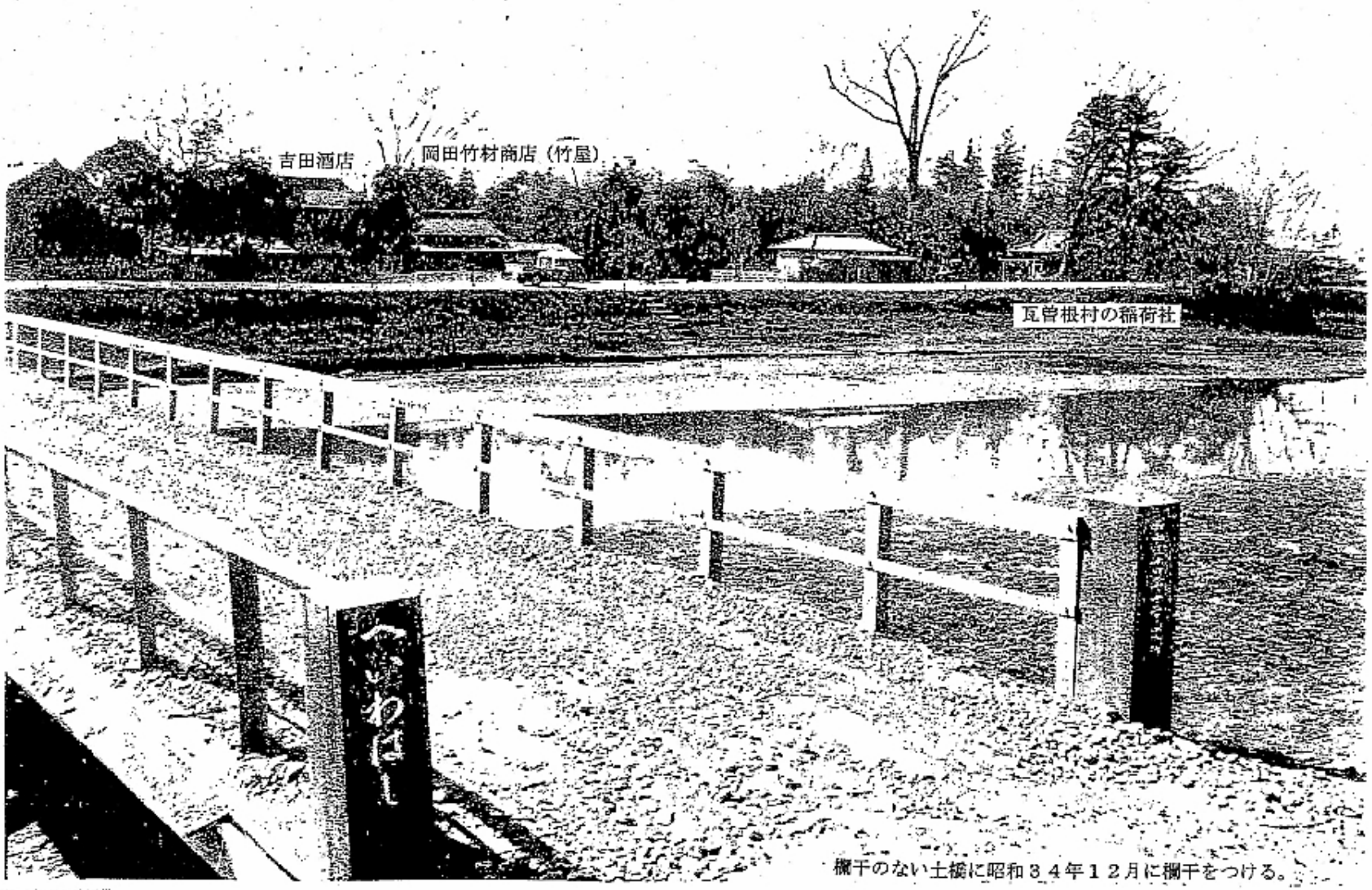
瓦曽根溜井（葛西用水）の藤田医院近くにあった平和橋の架け替えということで、上流の方に離れてはいるものの、同じ水路（葛西用水、瓦曽根溜井）に架かる橋であったために、旧・平和橋の名前を現在の橋に残したのである。昭和四十一年の秋に着工して、昭和四十二年の夏に完成している。

《新平和橋の着工》

元荒川に架かる新平和橋の方の橋は昭和四十年に着工し、昭和四十一年五月に完成した。

元荒川に架かるので平和橋とは言えないが、葛西用水に架かる平和橋に対して元荒川に架かる新たな平和橋の新設という意味で、藤田医院そばに架かる旧・平和橋の上流での再建に先駆けて、新平和橋の建設に取り掛かるのである。

欄干がついた旧「平和橋」（小林側から瓦曽根方面を見る）



欄干のない土橋に昭和３４年１２月に欄干をつける。

写真：高崎力氏提供

江戸時代の増林村の千間堀に架かる橋

越谷市郷土研究会　加藤幸一

《増林村の千間堀にかかる四つの土橋》

山本泰秀氏によれば、江戸時代に増林村の千間堀（せんげんぼり・現在の新方川〔にいがたがわ〕）に架かる橋として、次の四つの土橋があったという。

「定使野橋（じょうつかいのばし）」（現在の宮野橋（みやのばし））

「城之上橋（しろのうえばし）」（現在の鷹匠橋（たかじょうばし）の下流、今はない）

「市道橋（いちみちばし）」（現在の城之上橋）

「二子曽根橋（ふたごぞねばし）」（現在の千代田橋）

下の（　）内は昭和初期にコンクリートに架け替えられた時に改称された現在の橋名である。

明治九年刊の「武蔵国郡村史（ぐんそんし）」によると、旧・増林村を流れる千間堀に架かる橋として、「定使野橋」（現在の宮野橋）、「城の上橋」（現在の鷹匠橋の下流、今はない）、「市道橋」（現在の城之上橋）、「二子曽根橋」（現在の千代田橋）の四つがあげられている。

また、明治十三年測量の「二万分一フランス式色彩地図」によると、「定使野橋」（現在の宮野橋）、「市道橋」（現在の城の上橋）、「二子曽根橋」（現在の千代田橋）の地点に橋が架かっていたことがわかり、山本泰秀氏の見解を裏付けている。

《定使野橋と呼ばれた宮野橋》

山本泰秀氏によれば、宮野橋は「江戸時代は定使野橋と呼ばれていた」という。宮野橋から増林の浅間神社（現在の護郷〔もりさと〕神社）まで「宮の道」と呼ばれた小道が続いていた。さらに宮野橋のそばに「宮田」と地元では呼ばれた田圃が広がっている。増林六七六―一の今井家から増林七七〇の戸張家に至る用水と土手道に挟まれた地域である。

以上から、宮野橋は、「宮の道」の「宮の」から由来し、「宮」は、浅間神社（浅間宮）をさしている。そして浅間神社（現、護郷神社）と宮田との間には何らかの関係が推測され、事実、かつては神社を維持する費用として宮田からあがる収穫物の米や野菜を浅間神社の祭礼である六月三十日に毎年奉納していたのである。

《現在の鷹匠橋の下流にあった旧・「城之上橋」》

小島初治（はつはる）氏が古老から聞いた話によると、現在の鷹匠橋の下流の水門（花田第一樋門）の西隣あたりに、人が一人通れるくらいの千間堀に架かる橋があった。この橋は、当時は「城之上橋」と呼ばれた土橋で、増林の上組の人は「城之上橋」とよく呼んでいたそうである。

明治四十一年にできた大林の宮内庁（当時は宮内省）の鴨場に勤める鷹匠が、日光街道の現在のセブンイレブン越谷大林店の南方六十メートルの大林四〇―一三のハイツ梅ケ丘の南側道路から東に進み、大林下交差点を通過し、弥十郎会館（観照寺）の北側を通り、千間堀に突き当たると千間堀沿いに下流に進んだと推定でき、そしてこの土橋を渡って、旧増林村の地域で鷹の訓練をしていたのである。それゆえこの土橋を地元では、「鷹匠橋」とも呼

んでいた。昭和五年にこれより上流の現在の地に鷹匠橋ができたが、この橋名は、この時の宮内省鴨場の鷹匠より由来している。

昭和三十五年四月十五日発行の「越谷市の史蹟と伝説」（越谷市教育委員会・越谷市文化財調査委員会）によると、『享保年間より、この地（増林）が御鷹場となり、越谷より、鷹匠が名主（なぬし）板本氏に来る道に橋が架けられたところからこの名がつけられた』としている。現在でもこの説が広まっているが、はなはだ疑問である。「鷹匠橋」の呼称が地元から生ずるのは鴨場ができた後の大正年間の頃であろう。それ以前の資料には「鷹匠橋」の名称は見当たらない。

《新たな「鷹匠橋」の架橋と市道橋の架け替え》

山本泰秀氏によれば、「昭和に入ると、今井晃によって現在の鷹匠橋と城之上橋の地点にコンクリート製の橋が架けられ、それぞれ「鷹匠橋」「城之上橋」と名づけられた。」とのことである。今井晃は、埼玉県会議員を勤め（明治四十四年から大正四年）、増林村の村長も勤めた（昭和二年から昭和五年）、絶大な発言力のある地元の名士であった。

「鷹匠橋」は、小島初治氏が橋柱に「昭和五年」と年号が書かれているのを覚えていたので、何も架かっていなかったここに、昭和五年に新たにできた橋とわかる。宮内省の鷹匠が千間堀を渡って増林に行く時に使用する橋でもあった。

「鷹匠橋」の次に完成した下流の「城之上橋」は、コンクリート製に架け替えられる以前は、「市道橋」と呼ばれた土橋である。現在の鷹匠橋の下流の水門（花田第一樋門）の西隣あたりにあった旧「城之上橋」の名を残すために、架け替えられた市道橋に採用されたと思われる。

《二子曽根橋と呼ばれた千代田橋》

千代田橋は、江戸時代は二子曽根橋と呼ばれていた。千代田橋のいわれについては、次のとおりである。

「千代田橋」の橋名は、増林五三〇三の栗原（くりはら）晃氏の祖父である栗原新蔵の娘千代（大正四年四月四日生れの長女）の名前にちなみ、名づけられた。

晃氏の祖父は新蔵といい、二子曽根橋の架け替えを行い、千代田橋の橋名の名付け親となったのである。晃氏は、千代田橋の竣工が橋柱のプレートに昭和五年と書かれていたのを覚えている。

結婚当時の　千代（昭和10年頃）

千代田橋の名付け親・栗原新蔵

写真提供は栗原晃氏

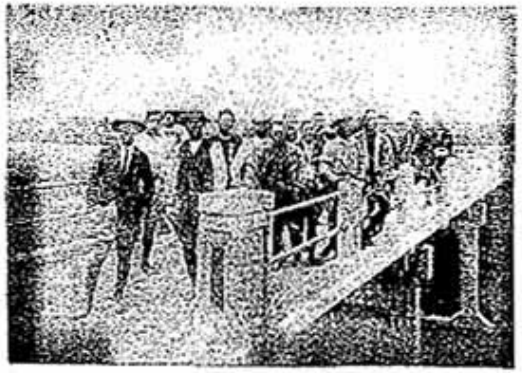
《千間堀に架かる七つの橋の請負》

千間堀の川幅を広げる直前に、千間堀に架かる七つの橋がすべてコンクリート製に架け替えられている。昭和初期のことである。

栗原新蔵は「赤水門（瓦曽根堰）を請け負った人」、そして「千間堀に架かる七つの橋を請け負った人」と栗原家一族では伝えられている。赤水門は大正の末期、七つの橋は昭和の初期に作られている。七つの橋の請け負った大元締めは、二代目田川郡二郎で、その元で新蔵が請け負ったのである。

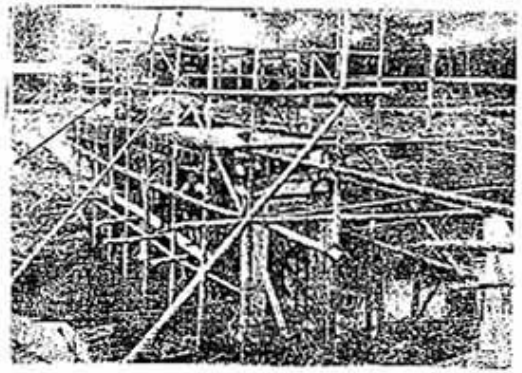
田川家は、逆川に架かる現在の新方橋の東詰めあたりから現在の老人ホーム「キャンベルホーム」にかけての敷地を有し、江戸時代から商っていた材木商の他に、土木建設にも大いに携わっていた。

七つの橋とは、上流からあげると、宮野橋、鷹匠橋、城之上橋、千代田橋、増森橋、新田橋、昭和橋である。増森橋は昭和三年十月に着工し、翌年三月に竣工している。新田橋は、昭和四年二月に着工している。昭和四年の末に竣工したと思われる。



右岸からみた増森橋

先頭は二代目田川郡二郎、最後尾は晃氏の父藤吉



建設中の新田橋

写真提供は栗原晃氏

しかし、実際の橋普請は、上流の鷹匠橋、城之上橋の二つの橋が小島初治氏の本家であった小島久馬次郎（くまじろう）の息子の石塚長寿が請け負っている。つまり、栗原新蔵の下請けとなって、二つの橋の建設を行ったのである。

小島初治氏によると、「石塚長寿は、橋建設の技術を習得するために、上流にある宮野橋の建設に人夫を引き連れて出向かい、無賃金で働いた」という。その上で、自分たちの身近な橋となる鷹匠橋の建設に取り掛かり、さらに下流の城之上橋にも取り掛かった。

橋の建設終了後に川幅を広げることによって、上流の村々の水田の水の落とし（排水）がスムーズにできるようになり、上流の村々にとっては多大な恩恵を受けることになる。今井基善氏によると、「上流の村々はいまだに土橋だというのに、橋の建設資金は、上流の村々（武里村、桜井村、新方村など）から一部か大部分を出してもら

ったのは、そのためである」という。

なお、山本泰秀氏の調査によると、江戸時代からと思われる明治九年当時の旧橋の大きさは次のとおりである（新田橋のみ木製で、他はすべて土橋）。

定使野橋（現在の宮野橋）は、　長さ六間三尺、幅九尺。
城之上橋（現在の鷹匠橋の下流）は、長さ六間三尺、幅九尺。
市道橋（現在の城之上橋）は、　長さ六間、　幅九尺。
二子曽根橋（現在の千代田橋）は、長さ六間三尺、幅九尺。
市道橋（現在の増森橋）は、　長さ八間、　幅九尺。
新田橋（現在の新田橋）は、　長さ八間、　幅九尺。
中台橋（現在の昭和橋）は、　長さ八間、　幅九尺。

※新たな千間堀の掘削予定とその変更（参考）

増林村内の千間堀については小島初治氏によると、「実は現在のキャンベルタウン野鳥の森あたりから、増森の三丁野にかけて、まっすぐな千間堀の掘削を測量までして予定していたが、この新たに作られる千間堀の堀筋が今井晃家の耕地にかかるため、新たな堀の掘削を断念し、現在の千間堀の拡幅と架橋に変更した」のだそうである。

※小島久馬次郎と石塚長寿について（参考）

小島初治氏の本家の久馬次郎は、小島初治氏宅の東側、用水の手前に住んでいたが、越ケ谷に引っ越す。地元から「泣く子も黙るアンバ」（アンバとは、久馬次郎が組織した安波組からきている）と恐れられて呼ばれ、地元やその周辺では一目置かれていたのである。久馬次郎の内縁の妻の子である石塚長寿は、後に品川の大井町に転居するが、親子ともども林泉寺の敷石の寄付に貢献している。その記念碑が門前に建っている。

この記念碑によると、大正十二年八月に久馬次郎が境内敷石として御影石三十九枚を寄付したことになっているが、実際には「久馬次郎の死亡後に、彼の功績を残すため故人に代わって親族が生存中にさかのぼって寄付したものである」という。久馬次郎の死は、関東大震災が起きた直前である。それは、初治氏の祖父が「久馬次郎が亡くなった」との知らせを聞いて越ケ谷に向かい、到着後に大正十二年九月一日の午前十一時五十八分の関東大震災に遭遇したことからわかる。

石塚長寿は、昭和三十八年五月、境内表参道（山門の外側）にコンクリートの敷石七十メートルを寄付し、翌年に大井町に転居している。

絵図と地図と写真でたどる大沢橋

原田民自

大沢橋は越谷市の越ヶ谷と大沢とを結んで元荒川に架かる鉄筋の橋です。正式名は江戸時代に名づけられた「大橋」である。江戸時代は境板橋とも称され、安永年間（一七七二～一七八〇）以前は、横幅が四間（七メートル二十七センチ）とあり、ほぼ現在の車道と歩道をあわせた広さであった。

明暦元年（一六五五）に関東代官伊奈半左衛門忠克によって掛替え工事が施工されたとの記録が残されている。このため最初の橋の架橋年代はかなり古いものと思われる。

元荒川は、往時（古代から中世にかけて）は越ヶ谷側が武蔵国埼玉郡、大沢側が下総国新方庄と二つの国の境界であった。大沢側は、戦国時代に下総国から武蔵国に改められたと推定されているが、一名「新武蔵」のうちの大沢村と呼ばれたようである。

日光道中は仙台藩・会津藩・秋田藩・盛岡藩・米沢藩・庄内藩等四十余の藩主の参勤交代の通り道であったため、元荒川に架けられた大沢橋も多くのお殿様が渡られた。

奥の細道の旅に出た芭蕉は元禄二年（一六八九）三月二十七日（新暦五月十六日）、草加宿で第一夜を過ごした後、翌日に越ヶ谷へ入り大沢橋を渡って日光へ向かったのである。

大沢橋が描かれた最古のものは、宝暦元年（一七五一）に盛岡藩に献上された「奥州道中増補行程記」。江戸日本橋から盛岡までを色彩鮮やかに描いたもので、道中界隈の風景が絵図と文章で克明に記録され、大沢橋も周囲の景観と共に描かれている。

明治二十二年（一八八九）二月、千住馬車鉄道が千住から粕壁まで馬一頭立て十二人乗りの馬車鉄道を開通させる計画を立てた。工事が進む中、大沢橋上に線路の敷設をすることに決まったが、橋の構造に不安があったのか鉄道会社は大沢橋の脇に専用の副橋を通すため杭打ちを行った。しかし川に多くの杭を打つことで大雨の時に水の流れが乱され、大沢橋が流出する危惧があるとの地元の猛反対が起こり、地元によって完成していた杭を外してしまう。結局、大沢橋を補強して馬車鉄道が明治二十六年二月に開通した。千住馬車鉄道も東武鉄道が開通する直前に経営不振に陥り廃業する。開業からわずか四年足らずの運行であった。

太平洋戦争中に国策として金属供出が各地で行われた。大沢橋の欄干が金属であったため全て取り外され、むき出しになったことがある。間もなく木枠の簡単な欄干が付けられたが、通行する車が運転を誤って欄干にぶつかり川に落ちそうになったことがあるという。

昭和四十年代に入ると越谷市でも交通量が格段にふえて、旧国道の大沢橋もその影響を受け一日あたり五千台もの車が通過していた。そのため大型トラックがすれ違う時には歩行者が渡る余地がなく危険に身をさらすことになった。夕方の五時ごろがピークで子どもはもちろん大人でも渡れない危険な橋と化していた。

越谷市では昭和四十二年（一九六七）十月に橋に平行して横幅二メートル二十五センチの歩道橋を完成させた。国道四号線バイパスが開通すると大沢橋の交通量もかなり緩和し現在に至る。大沢橋上の車両通行は現在は交互通行だが、一時一方通行の時期があった。

奥州道中（日光街道）越ヶ谷宿は江戸時代において日本橋から数えて三番目の宿場であった。

「駅要録」によると参勤交代で千住宿を通過した大名は三十七藩にのぼり、知行一万石以上の大名が石高に応じた人数を率いて自国の領地から江戸までを往復した。各藩が殿様を中心に大名行列をなして大沢橋を渡って行ったのである。

「駅要録」に見る石高、藩名と藩主は次の通り。

奥州道中旅行之分

高六十二万五千六百石	奥州	仙台	松平陸奥守
高二十三万石	同	会津	松平肥後守
高二十万五千八百石	羽州	秋田	佐竹次郎
高二十万石	奥州	盛岡	南部大膳太夫
高十五万石	羽州	米沢	上杉弾正大弼
高十四万七千石	同在内鶴岡		酒井左衛門尉
高十万石	奥州	白川	阿部飛騨守
高十万七百石	同	二本松	丹波左京太夫
高六万石	同	弘前	津軽越中守
高六万八千二百石	羽州	新庄	戸沢大和守
高六万石	同	山形	秋元左衛門尉
高五万石	奥州	中村	相馬長門守
高六万石	同	棚倉	井上河内守
高五万石	同	三春	秋田山城守
高五万石	同	岩城平	安藤対馬守
高三万石	同	一ノ関	田村左京太夫
高三万石	同	福島	板倉甲斐守
高三万石	羽州	上ノ山	松平山城守
高二万五千石	同	松山	酒井春之進
高二万二十一石	同	本庄	六郷阿波守
高二万石	奥州	守山	松平大学頭
高二万石	羽州秋田新田		佐竹壱岐守
高二万石	奥州	八戸	南部左衛門尉
高二万石	同	泉	本田弾正少尉
高二万石	羽州	亀田	岩城伊予守
高三万石	野州	烏山	大久保佐渡守
高一万八千石	同	黒羽	大関土佐守
高二万石	羽州	高留	織田越前守
高一万五千石	奥州湯長谷		内藤播摩守
高一万五千石	羽州	長瀞	米津伊勢守
高一万石	奥州下手渡		立花和泉守
高一万千石			南部播摩守
高一万石	奥州	黒石	津軽帯刀守
高一万石	羽州米沢新田		上杉駿河守
無高	松前蝦夷一円		松前志摩守
高一万千四百石	野州太田原		太田原飛騨守
高無之	同	喜連川	喜連川左兵衛督
〆高 二百五十七万七百二十一石 三十七頭			

奥州道中　増補行程記

宝暦元年(1751年)

御下り　橋を越候ては大沢町と申候　荒川ゆるく流れて水の色藍の如し　青樹川の岸に多く有之候　当所薪沢山のよし申候　赤山より出候て江戸えも参商買スト云々

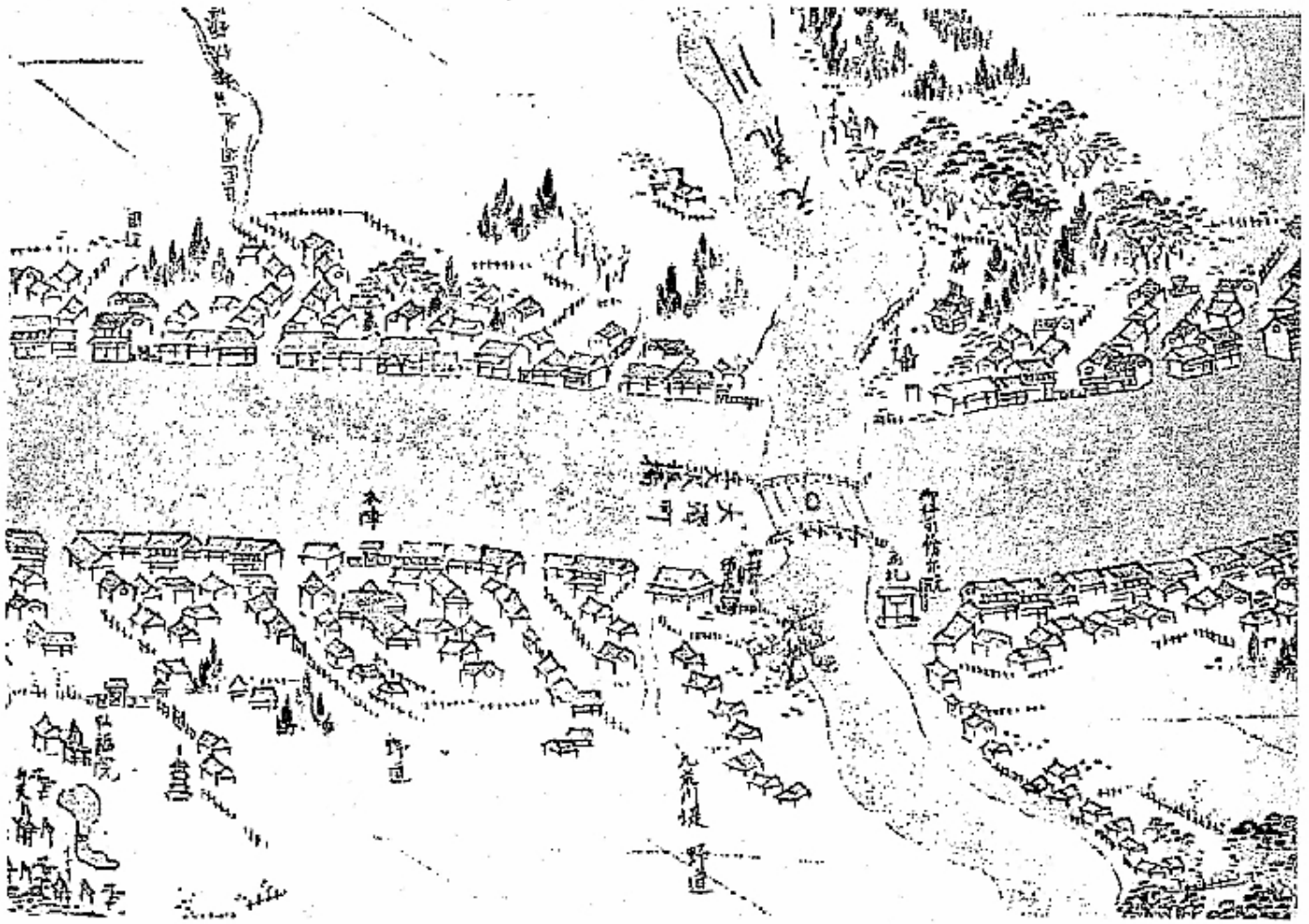
此辺に杭有、紀伊殿かり場と書たり　大樹公ノ御殿也　町ノ中に御殿有りト承候　当所より赤山爪とて名物出申よし江戸にて賞スル之ヲよし承候　一里塚有ト可考

江府通船多し　荒河橋長サ廿四間　此辺稲の苗なしらすと申スヲ植候と承候　御本陣　相田八右衛門　市神　神明と処ノもの申候　騎西郡　越谷　二里廿八丁

小社有　茶店多し　浅間大明神　市神　神明と処ノもの申候　松　竜　見へたり　神宮有　セイ札　両町合十七八丁と申候

日光道中分間延絵図

文化3年（1806）

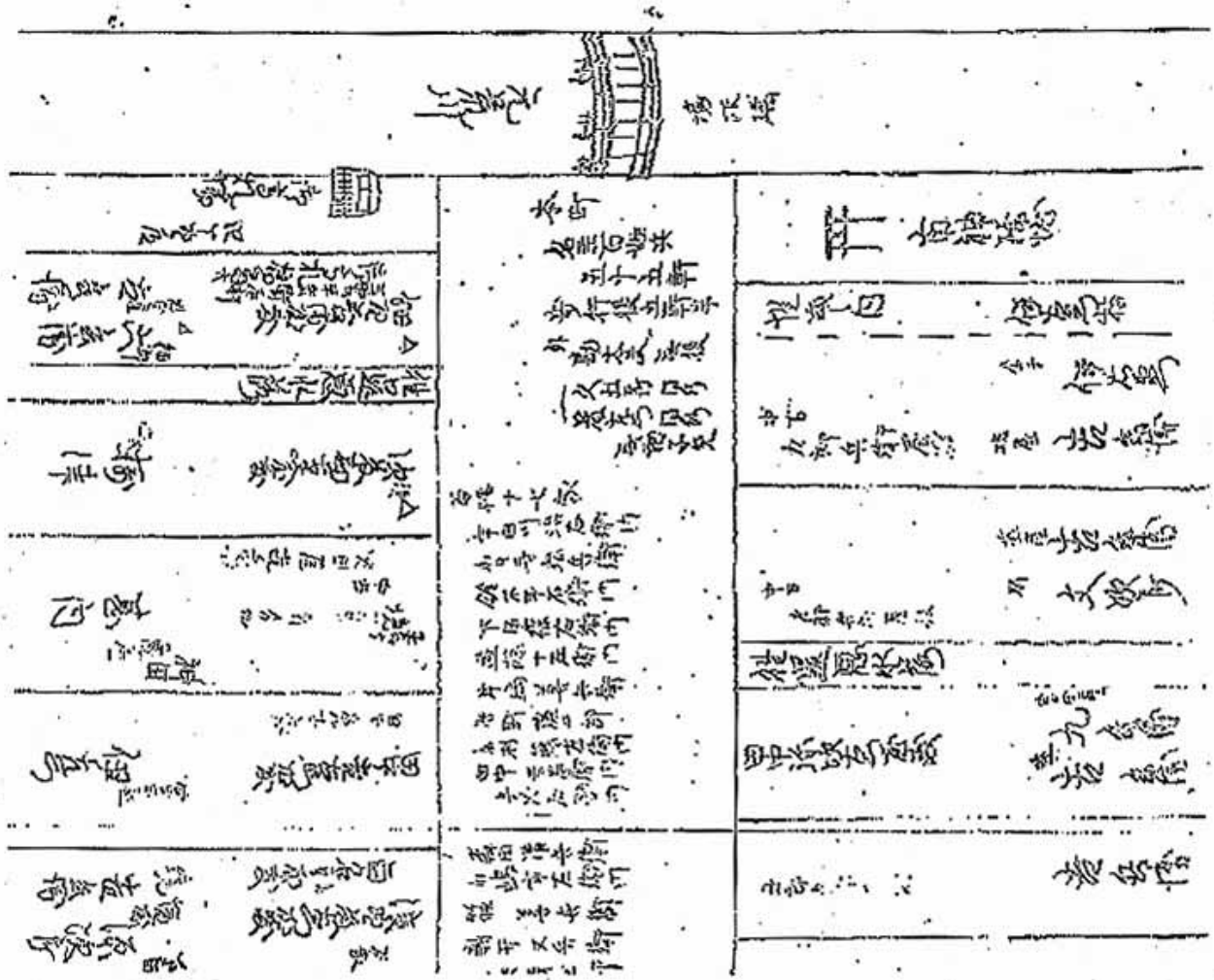


江戸幕府の道中奉行所において数年にわたり精密な測量や調査を行い完成させたもの。大沢橋は高欄（欄干）付きの板橋で長さ18間　幅3間

橋のたもとに高札場と稲荷と市神社が描かれている　往還廻り道並松伏領道　大沢町　字大沢

板橋　高札　御料所傍示杭　荒荒川堤　野道　本陣

越ケ谷瓜の実　文化末年（1815）～文政初年（1820）



越ケ谷町の絵図「越ケ谷瓜の実」　福井敏貞（横石源四）著の挿図　大沢線が堀板線と表記されている

堀板線　長十八間　巾三間　南ハ堀四間之所、安永年中より三間ニ成

「越ケ谷瓜の実」の記述では安永年中（1772～1780）以前は大沢線の堀幅が四間（7.27 m）であった。

エミールギメの日光紀行記

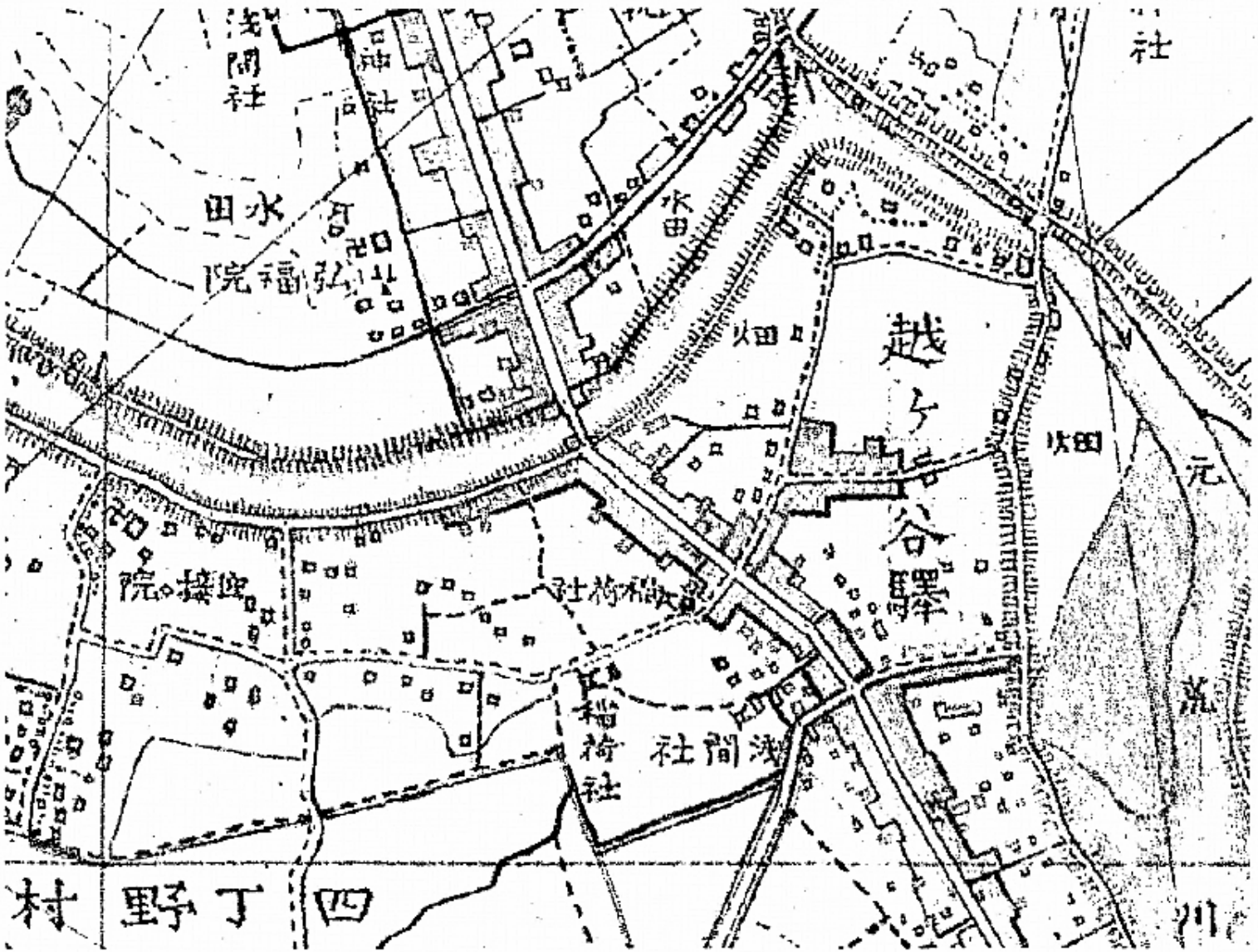
明治9年（1876）

フランスの富豪エミールギメは日光旅行の途中で温飩屋（うどん屋）で昼食をとる　同行したレガメーは越谷で4点の挿画を描いた

大沢橋のたもとの稲荷社の階段に腰を下ろして車夫の米を研ぐ温飩屋の女中　橋向こう側に市神社が見える　橋下に舟が浮かぶ

迅速測図に見る大沢橋

明治13年（1880）

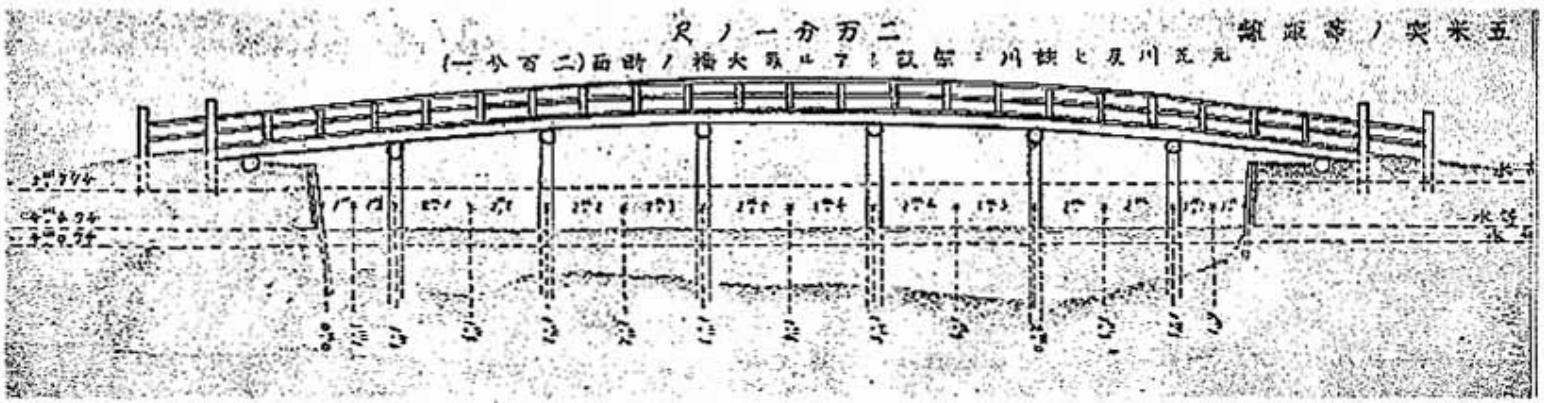


陸軍参謀本部によって実施された広域測量の本格的な地図　大沢橋をはさんで日光街道沿いに商家が並ぶ

何度も架け替えられた大沢橋 当時は木造りの橋 迅速測図 明治前期測量 2万分1 フランス式彩色地図 埼玉県武蔵国南埼玉郡越ヶ谷駅及び大沢町近傍村落

元荒川及ヒ該川ニ架設シアル界大橋ノ断面（二百分一）

明治13年（1880）



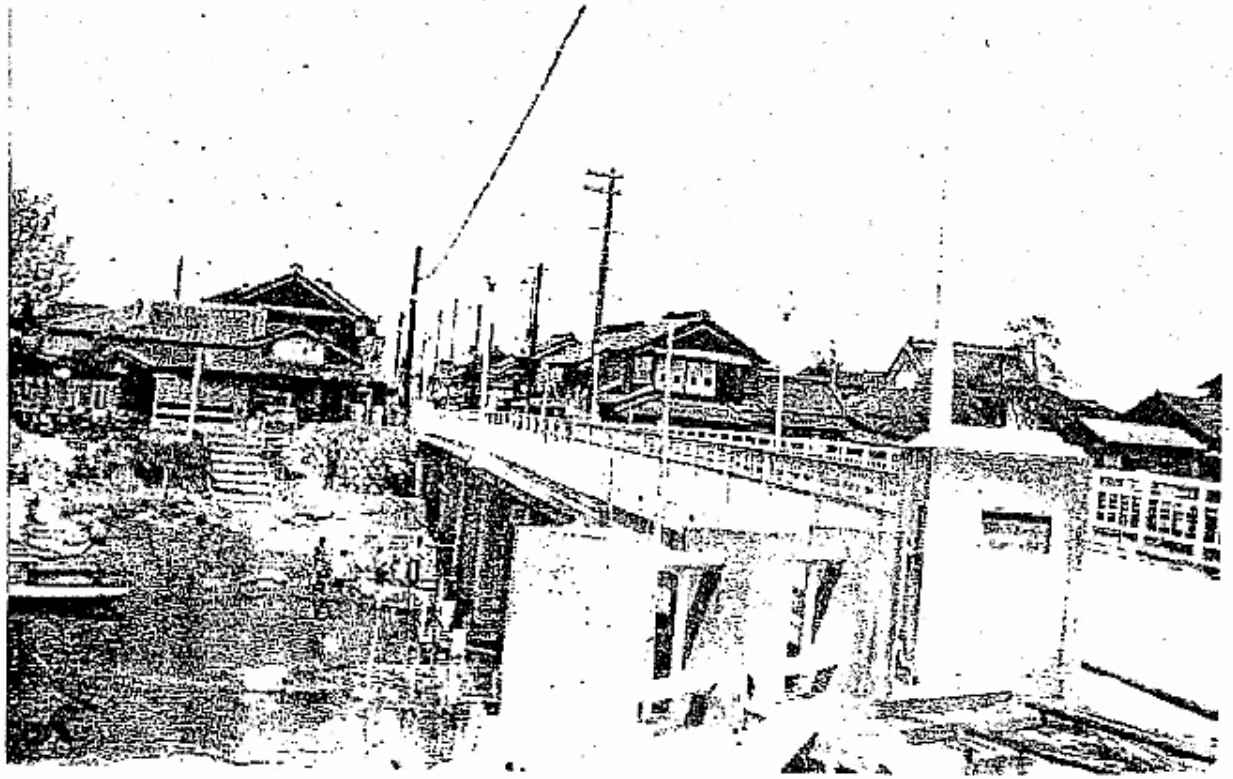
仮橋　大沢橋の架替え

昭和27年（1952）10月

大沢橋の架け替えでつくられた仮橋を渡る　右側で木製の大沢橋の解体工事が進む　橋向こうは、蔵造りの町並みが続く大沢町

完成間近の大沢橋

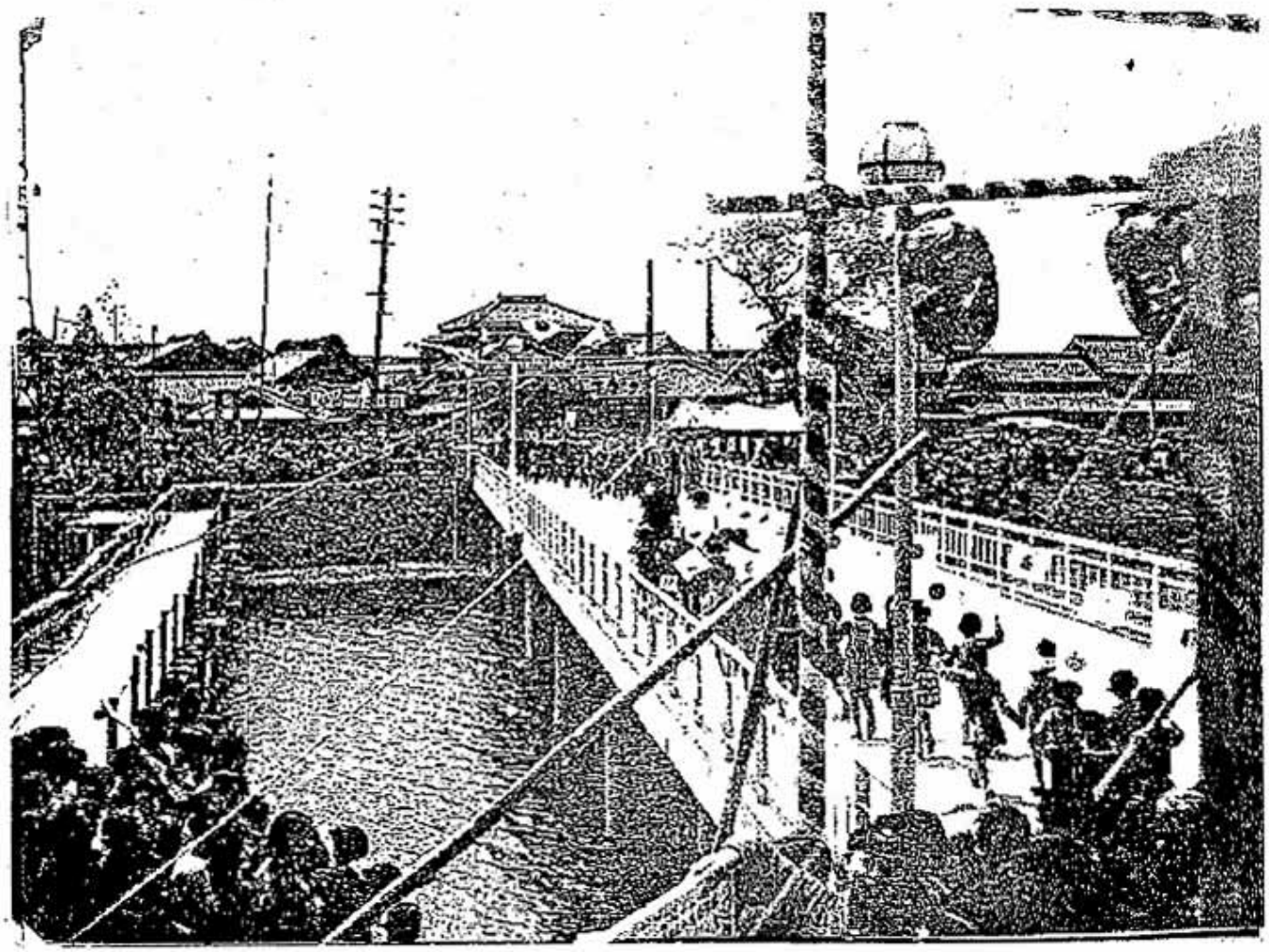
昭和28年（1953）4月



鉄筋造りに架け替えられ外灯と欄干も真新しい大沢橋　外灯と欄干の形が現在とは異なっている　橋の下で工事を行う人々

渡り初め式

昭和28年（1953）5月



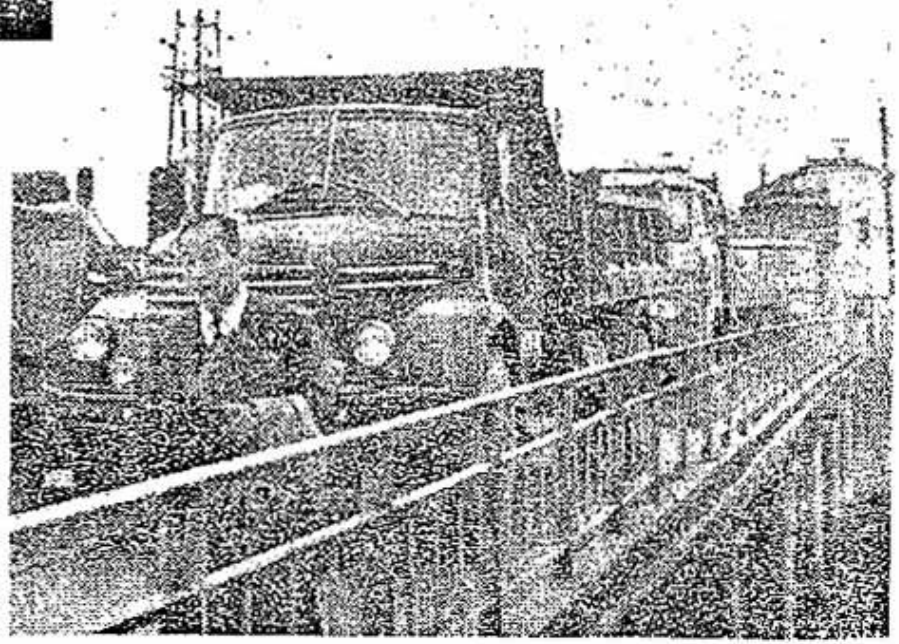
大沢方面から越ヶ谷町を望む　子供達が日の丸を振って完成した橋を渡る　左側に火の見やぐらと半鐘が見え市神社の鳥居がある

火の見やぐらから見た大沢橋

昭和３０年代前半　越谷寄りの元荒川土手伝いにあった火の見櫓から大沢橋を見下ろし大沢町・北越谷方面を見る。

大沢橋に歩道橋を

昭和４２年（１９６７）１０月



仮橋　完成間近の大沢橋　渡り初め式　埼玉県立文書館

火の見やぐらから見た大沢橋　越谷市立図書館

大沢橋に歩道橋を　サンケイ新聞

増補行程記　盛岡市中央公民館

元荒川の大水　越谷市役所

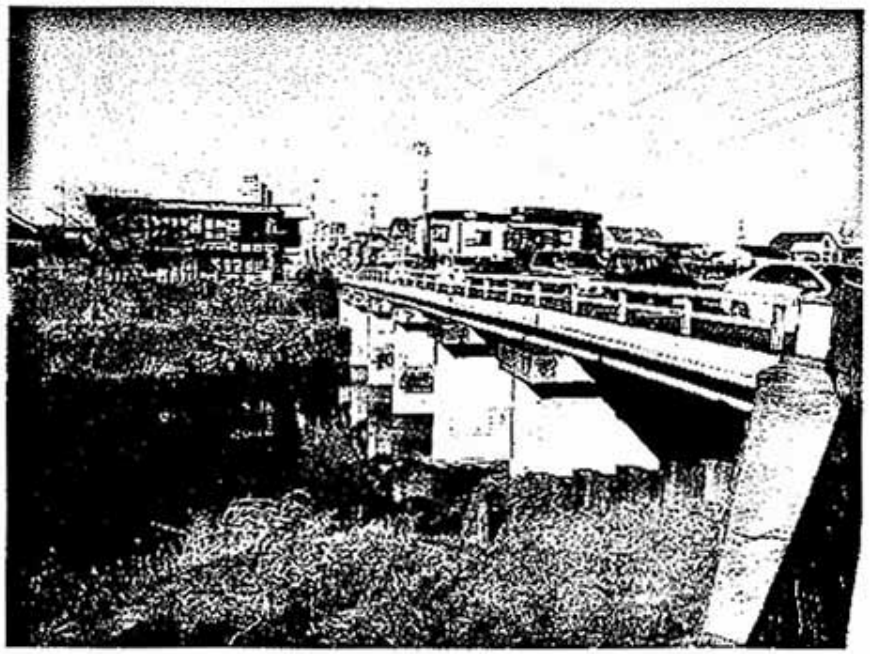
越ヶ谷名所絵葉書　埼玉県立図書館

大橋　東京観光交通社

「絵図と地図と写真でたどる大沢橋」の追加資料

大沢橋近景　平成二十一年（二〇〇九）年一月

大沢橋たもとの茶色の屋根の料理屋は、徳川家康が亡くなる一年前の元和元年（一六一五）創業という。遠方に北越谷駅前「パルテきたこし」の高層ビル（二十八階）を望む。



《本文の訂正》

この冊子の9頁、最後の行が抜けていました。次のように付け加えをお願いします。

越谷市では昭和四十二年（一九六七）十月に橋に平行して横幅二メートル二十五センチの歩道橋を完成させた。国道四号線バイパスが開通すると大沢橋の交通量もかなり緩和し現在に至る。大沢橋上の車両通行は現在は交互通行だが、一時一方通行の時期があった。

NPO法人・越谷市郷土研究会とは

◎史跡めぐりなどのイベントを毎月実施し、毎年、越谷市民まつり・越谷市民文化祭・こしがや文化芸術祭に展示部門で参加しております。

◎当会は、昭和四十年(1965)三月に発足し、平成十六年にNPO法人になりました。現在は会員数が三〇〇名を越える大所帯です。

ほぼ毎月行われる史跡めぐりは三八七回を数えるまでになりました。

◎当会の最近の主なイベントをあげますと次のとおりです。

平成十九年　七月二六日～八月六日　越谷市立図書館「日本一の力持・三ノ宮卯之助」展
平成十九年　八月二五日（土）講演会「生誕二百年・三ノ宮卯之助」（蔵書講演会の講）
平成十九年　九月二九日（土）ロマン漂う行田：足袋とくらしの博物館、忍城博物館
平成十九年　十月二四日（水）バス史跡巡り：妙義神社、碓氷峠と鉄道文化村
平成十九年十一月十四日（水）大間野の越谷市保存民家、旧中村家でのイベント
平成十九年十一月十八日（日）江戸東京たてもの園を見に行く
平成十九年十二月十五日（土）五十年前の越谷をさがし訪ねる
平成二十年　一月　三日（木）伊興七福神めぐり
平成二十年　二月二七日（水）六本木ーみんなで歩けばこわくない？
平成二十年　三月二三日～二五日　姫路市の三ノ宮卯之助銅像と飛鳥、山之辺の道
平成二十年　四月　九日（水）宮内庁埼玉鴨場、越谷と鴨場
平成二十年　四月二二日（火）バス史跡巡り：県北！埼玉歴史のふるさと
鷲山古墳・金鑽神社・塙保己一生家・鏡造社模範蚕室・ミカ神社など
平成二十年　五月二四日（土）陽春の市内岩槻道と旧長島村
平成二十年　六月　四日（水）話題の地下神殿と初夏の江戸川堤散策
平成二十年　六月二二日（日）歴史講演会「旧・越ケ谷宿と街づくり」
平成二十年　七月二三日（水）小江戸「川越」の歴史を歩く
平成二十年八月三十日(土)歴史講演会・方言の世界～越谷吾山から方言学へ～　蔵書講演の講
平成二十年九月二四日(水)～二八日(日)　越谷市立図書館「越谷の歴史あれこれ展」
平成二十年　九月二七日（土）素敵旅！「織都」桐生
平成二十年　十月二日(木)～十三日(月)「越谷歴史展」（レイクタウン・イオンホール）
平成二十年　十月十九日（日）越谷市民まつり「なつかし・五十年前ーくらしと遊び」
平成二十年　十月二二日（水）大宮の「鉄道博物館」と「県立歴史と民俗の博物館」
平成二十年十一月十四日（金）大間野の越谷市保存民家、旧中村家でのイベント
平成二十年十一月十八日（火）曹洞宗大本山総持寺の精進料理と横浜中華街
平成二十年十二月十二日（金）バス史跡巡り：つむぎと蔵と歴史のまち、結城
平成二十一年　一月三日（土）江戸最古を誇る谷中七福神めぐり

◎会報『古志賀谷』の隔年の発行（B五版、百十～百五十頁程度）及び無料配布（会員）

※なお、以上の他に、越谷市社会福祉協議会への寄付・文化財パトロールの活動なども行っております。また、学校や自治会、各団体などへの出前授業も承っております。

郷土研究会にお入りになるには

◎会費は、年間二千円（四月～翌年三月、会報・諸案内状・諸会議費等）です。どなたでも気楽に入会できます。市外の方でも歓迎致します。

◎申し込みは、はがきに「平成何年度より入会」とお書きのうえ、住所・氏名・電話番号をご記入し、下記までお寄せ下さい。または当会の各種行事の際にお申し込み下さい。

〒343-0041　越谷市　千間台西　二ー一七ー一六　宮川　進　方
NPO法人・越谷市郷土研究会
☎〇四八ー九七五ー九一三九
事務所：旧日光街道沿いにある越谷産業会館の道路斜め反対側、チャレンジショップ「夢空感(ゆめくうかん)」内にあります。

◎インターネットの「越谷市郷土研究会」には、越谷に関しての歴史の資料が満載されています。是非ご覧ください。